

「食べる楽しみ」について

日頃なにげなく行う「食べる」「飲み込む」という動作は、体を動かしたり考えたりするためのエネルギーを補給し、さらには成長に必要な栄養を補給する重要な機能です。何事もそうですが、普通に食物を咬んで食べることができなくなったり、飲み込むときにむせて苦しい思いをすると、初めてその機能の重要性が理解できます。

医療や介護の現場では、食べ物を細かくする「そしゃく機能」が低下した患者さんにはミキサーで細かくした食事を提供し、飲み込むときに食べ物が気管に入ってしまう患者さんには、チューブを鼻や口から胃に通して、栄養を直接流し込むことで問題を解決してきました。しかし、この医療は、患者さんにとってはずらぐ、時には生きる喜びを

奪ってしまうものではないかとの反省も出てきました。確かに、どんなにおいしい食べ物でも、ミキサーにかけられてはとも食べ物とは思えません。生きるか死ぬかの瀬戸際の患者さんにとっては、栄養をチューブで補給することも受け入れざるを得ませんが、生命に危険を及ぼす時期を乗り越え回復を待つ時期になると、チューブでの栄養補給は、「生きる」ではなく「生かされている」との思いが募るようになります。

ヒトは食べるために生きるのではなく、食べることができなくなるとは生きるために最低限必要な行為であることは事実です。ヒトには食べることに執着が本能として、生まれつき脳の中にプログラムされています。「楽しい」「うれしい」などの感情が、「食べる」という生きるための行動と結びつき、「おいしい」といった感情も生まれてきます。

これらのことから、寝たきりのお年寄りや脳に障害を受けた患者さんが、「口から食べ物を食べたい」と訴えることは決して不思議なことではないのです。

俳句

畦塗りのなかな味な曲りやう
 飯田 勇一
 子の許へ時速百キロ夏燕
 鯉淵寿美恵
 工事中の坂の中段夏燕
 いそべきよ
 たてがみの乾いてるたり花の登
 竹内 幸子
 雲低く垂れ夕雲雀見え隠れ
 仲田まちゑ
 藁屋根を見下ろしてをり鯉幟
 森 静江

文芸しるさど

短歌

北国は哀しみ秘めて春謳ふ山
 河は凜とみどり増しゆく
 大森 久子
 春立ちて雑草引けば黒土を根
 はしたたかに掴みて離さず
 青柳 京子
 空腹と知ればガソリンを満たし
 やる吾が足となる古きバイクに
 杉山みちこ
 震災より早や一年の過ぎ去り
 て犠牲者のみ魂安かれと祈る
 所 美恵子
 彼岸へと友は旅立てりひっそり
 と名残のさくら境内に散りあし
 渡辺千紗子

夕焼を一人占めする窓辺なり
 飯村 昭子
 チューリップ花壇の中をチン
 ドン屋 寺門 孝子
 クロッカス明日の太陽待ちて
 をり 今瀬多代美
 初孫よ元気に育て鯉幟
 袴塚よし子
 故里は祭を待ちて日脚伸ぶ
 一杉 常子
 白牡丹音なき雨に咲きにけり
 瀬谷 博子
 母の日や卵囊抱え蜘蛛急ぐ
 岩下 金司

徳川家の遺品の多き展示場に
 日本史の書類うず高くあり
 秋山 愛子
 高校野球に宣誓をせし阿部君
 の「素晴しかったよ」勇気をも
 らふ 山形 式妙
 爺ちゃんの膝にだっこの長男も
 今日主役で田植終わらず
 鶴田 すが
 満開の桜愛でつつ公園でメタ
 ボ予防に努めて歩く 藪部 光子
 鯉のぼり大空に舞う勢いはヨ
 チヨチ歩く初孫守る 富田 欽子
 満開の桜花見入れば他の花に
 抱くことなき想いわきくる 枝 不美
 老いしなど思ひたくなし茶の
 旧友の計報を聞きてしばらく
 を祈る 片見 和枝

川柳

ほととぎす背戸の里山際立てる
 田口 勝元
 農繁期八十寿過ぎても鋤頭
 青木新三郎
 新入生期待の詰まるランドセル
 富田 多蔵
 予報士も待ちにまいったよ桜咲く
 飯村 孝一
 お詫びと訂正
 5月号に掲載した今瀬多代美さんの
 俳句のふりがなに誤りがありました。
 した。お詫びして訂正いたします。
 正：ねはんにし 誤：ねはんにひ

草ひきて母子草とう名にひか
 れ残しおきたる我はひとり居
 川上千代子
 夕ぐれて背戸の小庭にひそと
 咲くシャガの花叢風立ち流る
 島 愛子
 潮風が育みたるや花椿長き参
 道此度も訪へり
 多田志保子
 病室の窓を明ければ草むらに
 小鳥さえずり心癒されし
 坪井きよ子
 竜が地に降り来てあばれたる
 如し街も車も吹き飛ばす見ゆ
 萩谷登喜子
 県庁の二十五階から見放くれ
 ば筑波はおぼろ春来たるらむ
 富田佐智子